

## 日本評伝選『廣池千九郎』の執筆について

橋本 富太郎

廣池千九郎の人生全般を伝記的に著した書物には、山岡莊八の小説『燃える軌道』(昭和49年～)があり、横山良吉の『廣池千九郎小伝』(昭和51年)も名著の誉れ高い。『劇画廣池千九郎』(平成2年～)もこれに加えるべきだろう。さらに、決定版というべき『伝記廣池千九郎』(平成13年・以下『伝記』)がある。735頁にもおよぶ『伝記』の内容は実に詳細でバランスの取れた内容となっており、廣池を知るための必読書ともいえる。当然ながら、今回の『ミネルヴァ日本評伝選 廣池千九郎—道德科学とは何ぞや』(以下『評伝』と略す)は、それらとは異なる意味を持つものでなければならない。

まず意識したのは、時間の流れについてだった。『伝記』は、生涯を7つの時代に区切り、それぞれの時代の中でテーマごとに論じられている。その結果、一つ一つの事跡がよく意味づけられている半面、時間の流れが掴みにくくなるところがあった。そこで『評伝』は極力時代順に書き、全体の流れが捉えやすくすることを心掛けた。それと『伝記』は、史料がすべて現代語に書き改められているので、『評伝』ではなるべく原文を尊重し、当時の雰囲気をも忠実に伝えることを意識した。

次に、自分なりに廣池の一生に問う課題として、「道德科学の形成過程」を設定した。一つの理論体系を理解する方法として、現在の形を分解したり比較したりする方法があると同時に、それがどのようにして形づくられてきたかを探る方法があり、廣池の人生を跡付けることはこの方法に通じるといえる。

こうした観点により第一に、廣池のルーツとして家庭環境と大分儒学の伝統を重視して紙面の多くを割いた。これを辿ると、廣池の道德科学の考え方は、三浦梅園の時点ですでにほぼできあがっていたことに気がされることであろう。

廣池は小川含章の薫陶を受けたことに折々に言及しているが、その際、必ずといってよいほど小川が「帆足万里の高弟」であることに触れている。帆足は、先哲(三浦)の思想を科学的に説明した人物である。廣池は帆足の研究を一步進め、さらに日本の精神文化の深みを添えるとともに、恒久的な教育体系へと展開したのだった。このことは、瀬戸衛によってずっと以前

に「三浦梅園の条理学、帆足万里の窮理学から発展明確化して、天地の法則をもとに道德科学の新精神科学を創設し確立した」(『研究ノート』モラロジー研究所、昭和45年)と喝破されており、廣池も、自身がそう評されることには満足するだろう。

『評伝』はこのような視点にあるので、副題は「道德科学とは何ぞや」(『道德科学の論文』第1巻第1章のタイトル)とさせていただいた。廣池の人生を問うことは、その道德科学の成り立ちを問うことになるからである。しかし、この副題は関係者の間では平板すぎると不評だった。

確かに、普通に考えれば、廣池の人生全般を表す言葉ならば、「慈悲寛大自己反省」などの格言に相応しいものがある。特に「慈悲寛大自己反省」は、廣池の揮毫においても代表的なものであり、自らの写真に添え書きするなど、廣池の人生を象徴するのにこれ以上のものはないと思うが、副題に採らなかつたのは、上記のような『評伝』の視点を優先したためである。

ついでにいうと、「慈悲寛大自己反省」は、非常に高度な概念であって、見たり聞いたりして直ちに理解することの難しい裾野の広さを持っている。私は大学の授業において「道德科学」を担当している関係で、この格言について学生に考えさせることがある。すると学生たちは、「とても真似のできない凄い道德だ」等々と評する一方で、「相手の罪を放置することはよくない」とか、悪を討つ「正義」も必要だなどという部分的な理解による意見を返してくる。

しかし、ここでいう「慈悲」は「正義」を包含する概念であり、「感化」によって相手までも改めさせる高い品性を要求する道德である。文字自体が単純な徳目であるので、この格言は、表面的な理解による軽い印象を受けることが懸念されたので敢えて避けたということもある。

ただ、『評伝』においても「正義」について十分言及していないことは指摘されることであろう。そもそも、廣池自身が非常に正義感の強い人物であり、『評伝』ではあまり事跡を拾えなかつたが、「悪」に対しては厳しく対処する人生を送ってきた。こうした内容を十分に紹介できなかったのは筆者の責任である。

もう一つ学生の関連で、本書の視点について触れて

おくと、妻の春子を重視したことが挙げられる。ある年、「道徳科学」の最後の授業で、1年間の感想文を受講生に書かせた。たいていの学生は、五大原理の解説や国家伝統に対する感慨などを甲斐甲斐しく記入用紙にびっしりと書いてくる。ところがある女子学生が1人、たった1行で、

春子の素晴らしさがわかった。が、春子のようにはなりたくない。

とのみ書いてきた。

私は目を見張った。1年間の授業では、道徳科学の理論体系から、国家伝統の事例、現代的課題、そして形成過程としての廣池の人生と、30回の講義で幅広く論じてきた。確かに、春子に言及はしたが、それは主人公の配偶者として付随的に述べたに過ぎない。その授業全体に対する感想がこの1行だったのである。

理論体系を知るには、形成過程を知るのが有益であり、道徳科学におけるそれは廣池の人生であって、その最大の功労者が春子であり、その苦悩がいかに深かったかを、1行で表現されてしまった。『評伝』を読んてくださった方ならば、私がこの学生に高得点を与えざるをえなかったことに理解を示してくださると思っている。この感想文にも触発されて、春子の存在をより強く意識して、廣池の人生を捉え直すことにした。

こうして『評伝』は、以上のような観点に必要な史料ばかりが引かれているので、廣池の人生を語る上で触れられるべきそのほかの重要な事跡がいくつも漏れていると、お叱りをたくさん頂戴することになると思う。個人救済や経営指導などの事例は、門人たちによって膨大に記録されているにもかかわらず、『評伝』はそれらをほとんど拾えていない。また、筆者の専門の関係から、歴史や日本の国体に関する研究業績に偏り、自然科学や言語学など、廣池が多くの労力を割いた分野が手薄になっていることも指摘されるところである。

その上、筆者の責任を果たしていないところも多々ある。自分としても残念なところは、第2章に「国学

者の群像」という節を設けており、ここに挙げるべき国学者たちの人間模様を示す興味深い史料がたくさん残されているのに、力及ばず、それを描き出すことができなかった。これらの問題点は、ご叱正を賜りつつ、今後の著述に反映させていかせていただければと思っている。

最後に、廣池における重要課題であった皇室・国体について触れておきたい。読者の中には、廣池が日本の皇室を、世界の五大道徳系統の一つに列し、日本人にとっての最大の恩恵者の系列に置くことに対して、違和感を持つ方もおられることと思う。この点が、現在と廣池の当時と、読者の事前情報において最も異なっているところであって、十分に補足しなければならぬ内容であったが、『評伝』はその点をはなはだ不十分であったといわざるをえない。

今やこの問題は、廣池論に限ったものではなく、日本の歴史および道徳を考える際には、必ず取り組まなくてはならない段階に来ていると思われる。平成17年に起きた皇位継承問題の際にも、情報不足が課題となっていた。

こうした課題に対しては、所功教授を中心とするグループによって、平成21年の『皇室事典』等が刊行され、全体像の理解に供されている。さらに近年には、「皇室関係資料文庫」がモラロジー研究所内に設立され、情報の蓄積が始められている。自分としても、これらの成果を取り入れつつ、いずれ廣池千九郎の国体論について、国学者の群像をふまえ、皇室の道徳に関する事例を十分に検討しつつ著述していきたいと思う。

最後に、関係者の皆様のこれまでのお力添えに感謝申し上げたい。そもそも、今回の執筆のきっかけとなった論文を書けたのは、井出元・櫻井良樹両教授をはじめとする諸先輩方がすでに史料を広く収集し、かなり整理された段階にあったことが大きかった。そしてその論文を出版社に紹介し、指導を惜しまれなかった所功教授と、色々とお迷惑をおかけした編集担当の田引勝二氏のご助力なくしては『評伝』はありえなかった。改めて心より御礼申し上げる。